

「コタツで詠う富士の詩」

山梨大学 副学長

伊藤 洋

「田子の浦ゆうち出で
て見れば真白にぞ富士
の高嶺に雪は降りける
これは、『万葉集巻三』
所収の赤人の歌だ。つぎ
の長歌の反歌として詠ま
れたものので、正月にびこ
たりなもので長くなるがこ
こに引用しておく。時ゆ神
々天地の別れし時ゆ神
さびて高く貴き駿河なる
富士の高嶺を天の原振り
放け見れば渡る日の影も
隠らひ照る月の光も見え
ず白雲もい行きはかりけ
り時じくぞ雪は降りける
語り継ぎ言ひ継ぎ行かむ
富士の高嶺は」

この反歌のキーワード
は「田子の浦ゆ」の「ゆ」
だ。これは、「由」で、よ
りどころ、よってきたる
いわれ、わけなどを、転
じて空間的な意味では
「經由」を意味する。
古来、田子の浦は富士
川の西岸、現在の蒲原・
由比・興津の海岸のほと
ども富士の温州静岡とい
り積もる頃の高嶺に雪が
者は、この海岸を經由し
て、開けた場所に出たら
真つ白な雪に覆われた富
士が眼前に迫ってきた。

一首は、その美しさを飾
りを削いで詠った。目吟
なのである。詠った新古
他方、この歌は、新古
今集にも収録され、田子
の浦にうち出でてみれば
白妙の富士の高嶺に雪は
ふり一つとして、小倉
百人一首に膾炙したも
とである。こちらは、田子
海に漕ぎ出してまたに見
上るお山にば、真つ白な
富士の山に雪の降る季節
が降つてお山にば、真つ
である。歌としては、この
方が美しいが、致命的な
のは、この歌には、嘘が
と、富士山に雪の降る季
節は寒くて、船に乗らな
ださう。それには、乗ら
措くとう。それは、今さら
雪が降つていも、今さら
うこそ降つていも、今さら
ガスコと覆われない。下
ら。全くと見えて、下か
ど。論外。甲州に住む者
には、私ただこ、白の雪
に、私ただこ、白の雪
である。常識な者の
歌は、赤人を騙つた偽者

